

# 文芸OGネットワーク通信

〒101-8437 東京都千代田区一ツ橋 2-2-1  
 共立女子大学文芸学部劇芸術研究室内 文芸 OG ネットワーク  
 URL [www.kyoritsu-wu.ac.jp/bungei](http://www.kyoritsu-wu.ac.jp/bungei)  
 代表 川瀬 治子 発行 2023. 9. 15

vol. 36

## 学部創設70周年・OGネットワーク創設20周年によせて

今でもコロナウィルスが消えた訳ではありませんが、ようやく目途がついてきました。

この間、会員の皆様の周りにも多少の変化はあったかもしれません。それでも今これを読んでおられる方々が、ご無事であることにエールをお送ります。

今年には文芸学部創設 70 周年の年であり、又 OG ネットワーク創設 20 周年でもあります。

学部創設 50 周年の年に市川和子先生や諸先輩方の発案で、文芸学部 OG の為の情報発信ができれば、と始まりました。当時市川先生はすでに御病気がおありで、それもあつてか文芸学部ならではの清新な特色の組織創設に、ことのほかお力のかたむけられました。残念ながら先生は創設後まもなくお亡くなりになりました。市川先生の思いを百瀬好子さんが引き継がれ、OG ネットの今の活動の土台作りに尽力されました。

これまで、劇芸術資料整理、共立祭展示参加、在学生支援、文芸サロン講座、本館ホールでのポスター展示協力、共立祭でのバザー、OG やその他の方も利用いただいたお休み処の設置、そしてこの通信の発行等がこれまでの主な活動です。

学部創設 70 周年に合わせて、「OG ネットでも何かプランは有りますか」と、半沢幹一先生より打診がありましたが、コロナ禍のblank開けの状態では、正直なところ、「特に何も」としかお答えできませんでした。半沢先生は文芸学部報の最初からの復刻版(1面のみ)を作られ、それをOG ネットにも分けていただけるとの



共立祭参加 (2012年「ハムレット展」)

ことでした。OG ネットも 20 周年の節目でもありますので、この申し出をありがたくいただくことにしました。70 年前当時、女子で 4 年制の大学に入学するのはまだ稀でした。そのような時代に、学生を迎える期待と責任が紙面から伝わってくるかのようです。

ご自分の該当する年の記事は、多分興味を惹かれることと思います。OG ネット 20 周年としては、特に計画はありませんが、この記念誌をそれに代えさせていただきますことにしました。

川瀬治子 (1977 卒)



今まで発行された会報の一部 (創刊号は「さくら前線」という名称で発行されました。)

## 70周年記念 ホームカミングデイ

2023年7月30日(日)ホームカミングデイが開催されました。

文芸学部懇親会では学部創設 70 周年を記念して、「卒業生と教員によるトークセッション」が催され、稲見和子さん (1974 卒) と高橋京子さん (1989 卒) がそれぞれ 70 代、50 代の代表として出席されました。

## 短歌と私

渡邊千恵（一九六〇卒）

第一歌集『神帰杉』を二〇一七年九月に出版してからかなりの年月が過ぎている。そろそろ第二歌集『神迎杉』などと思いつつなかなか実現に至っていない。

岐阜県郡上市の古今伝授の里に住み自然豊かな環境の中ゆつたりと流れる日々に於いて詠み綴った自選短歌十数首を記すこととさせていただいた。

- \* いまあるを振り向き見ればこの道に幾たびも散るさくら有りたり
- \* 雪解水きよらに奔る長良川ひかりも彩に春をつれくる
- \* 黄砂また朧おぼろの花見なり色柄さまざまマスク賑わう
- \* 風にのる梵鐘の音を背にゆけば「神迎杉」桜の並木
- \* 古今伝授の里を庭と親しみ遊び慣れたる四季の風たち
- \* 冬囲いはずされたる牡丹園にほのとざわめく新芽の吐息
- \* 吹く風のように纏いてこの掌にもつかみたさかな華麗な一生
- \* 永劫の一瞬を生きよと諭さるる然れど我の踏み惑う余生
- \* その昔越美南線と言われし単線鉄道、今「長鉄」よ
- \* 清流を右に左につづら折りトンネル幾多抜けゆく鉄路
- \* そびえたつ山また山の懐田冬陽に広く眠るがごとし
- \* 六花舞う無人の駅のしめやかさ母とわれとのほか人氣なく
- \* 昭和末期第三セクタに移管され長良川鉄道となりたり
- \* 沿線の樹木のみどりを映しつづ長良の川の碧き水音
- \* 初春の風をよびこみ観光列車「ながら」鮎号をスマホにて予約
- \* 煮染めたる鮎の頭よりいただきぬこれぞこれぞと舌鼓うつ
- \* デザートのまあるきムース地球かと笑みつ掬えり二匙三匙

劇芸術資料室から

## OSK 日本歌劇団を応援しています

劇芸術資料室には数多くのパンフレット、チラシ、ポスター等が保管されています。その中でもひとときわ華やかなのは宝塚歌劇団関連の資料でしょうか。これは第一期生の江川優香里さんのご協力によるもので、古いチケットや切り抜き記事なども現存しており、江川さんの幼少時からの貴重な観劇体験の賜物と思われまます。

宝塚歌劇と同様の歌劇団が大阪を本拠地として活動していることをご存知でしょうか。それはOSK日本歌劇団で、100年の歴史（1922年創業）の中での出身者には、歌手の笠置シズ子や女優の京マチ子がいます。このOSKに共立女子大学文芸学部にゆかりのある団員がいます。2016年に初舞台をふんだ娘役の唯城ありすさんで、劇芸術コースに2年次まで在籍した後OSKに入団されたとのこと。在学中指導された鈴木国男先生からありすさんを紹介されてからは、新橋演舞場等での東京公演には資料室も必ず観劇に行き応援しています。

ありすさんの活躍は目覚ましく、8月の大阪公演『へぼ侍』では、主演の翼和希さんの相手役に大抜擢され、初めてヒロインを演じることになりました。今年度後半のNHK朝ドラ『ブギウギ』（笠置シズ子が主人公）では、翼和希さんが歌劇団のトップスター役で出演しますので、ありすさんも団員として出演されるかもしれません。OSKのフィナーレは団歌「桜咲く国」を歌いながらの恒例の「傘回し」。そんな場面もドラマで見られるかもしれません。これからのOSKに期待しましょう。



唯城ありす

坂本和子（1974卒）



女性の自立と社会的地位向上をめざす建学精神のもと、共立女子学園は創立137周年、そして本年、文芸学部は70周年を迎えます。学び舎を巣立ったあと、仕事や家庭、地域など社会の様々なシーンで共立 spirit を放っているOGを紹介していきます。

file 12  
田弘美保  
Miho Tahiro

卒業と同時に新設された文芸メディアコースの助手となり、5年間勤務。その間も教師を目指し、採用試験を受け続ける。助手の任期を終えたあと1年間予備校に通い、ついに合格、都内の中学校で念願だった教師生活をスタートする。その後、結婚、出産を経て、現在はご主人の実家近くに住み、教師として母として日々奮闘中。日本文学コース2002年卒。

——まずは、学生時代の思い出を聞かせてもらえますか。

2年次で行った日文コースの研修旅行が一番思い出深いですね。旅行委員だったこともあり、行き先を決め、日程を組み立てるなど深く関わっていたこともあります。何より以前から行きたかった「奥の細道をたどる東北への旅」だったので、真っ先に思い出される出来事です。当時の日文の先生は東北出身の方が多かったこともあり、そこでしか聞けない貴重なお話も聞かせていただき、また、せっかくだから岩手の宮沢賢治ゆかりの地も巡ろうということで、充実した内容の研修旅行となりました。

——東北に行きたいというのは、何か理由があったのですか。

中学時代の国語の先生の影響です。専門が松尾芭蕉で、大学時代に芭蕉の足跡を辿る旅をして、その時に山寺\*で拾ってきたセミの抜け殻を授業で見せてくださったのが忘れられなくて。何十年も前に拾ってきた抜け殻をとってもきれいに保管していたことにもやけに感動して、いつか一度、行ってみたいと思っていた場所でした。

——実際に同じ場所に立ってみていかがでしたか。

先生はここまできて、セミの抜け殻を見つけて、心躍ったのだろうか…とか、いろいろな思いが過りました。

——そうした特別な“思い”が詰まった場所は、感じる深みが違いますよね。

そうですね。まさに、先生の芭蕉への情熱に導かれてたどり着いた場所でした。今、私も芭蕉の授業では、この研修旅行で行った時の写真を生徒たちに見せています。「画質が荒い」「服がダサイ」とか言いながら喜んでくれています。芭蕉の授業をするたびにこの時の思い出が蘇ります。

——素敵なエピソードですね。中学時代の国語の先生の情熱がそのまま田弘さんに受け継がれているようですね。

私も生徒たちに何かを感じてもらえる授業をしていけたらと思います。教師になりたいという思いは中学の時から

持っていたのですが、採用試験に落ち続けまして(笑)。助手になってからも毎年受けていたのですが受からず、助手の任期が終わったあと、1年間予備校に通い、6回目で受けました(笑)。

——途中で心折れることなく、念願を果たされたのは素晴らしいですね。

本当にあきらめなくてよかったです。教育現場はとても忙しいですが、毎日が充実感でいっぱいです。初めて担任を持ったときも嬉しかったですね。やはり、自分のクラスというのは思い入れが違うんです。

——現在はお子さんも小学生ということですが、仕事、結婚、子育てのバランスは、どのように工夫されていますか。

いやもう、どれだけ家族を犠牲にしているかなと(笑)。仕事を始めて1年目で結婚し、出産後は3年間、育休をもらいました。育休を明けて、これは協力者がいないと無理だと思い、夫の実家から徒歩2分の場所に引っ越し、義理の母にサポートしてもらい、学童の先生やご近所の方など、皆さんの力をお借りして…という状況です。ただ、今の職場は同僚に子育て世代が多いので働きやすく、ありがたいです。

——では最後に、今後、教師として目指していることを聞かせてください。

おもしろいと思ってもらえる授業をしたいです。心を動かせる授業といたらいいでしょうか。以前、生徒から「真面目でつまらない」という声があったので、「じゃあ、おもしろくなるように努力する」と宣言したら、より目が厳しくなって「おもしろくなってない」と言われて(笑)。これからは恩師のように情熱を持って授業に臨んでいきたいです。

——貴重なお話をありがとうございました。

聞き手 高橋京子(1989卒)

※芭蕉の句で知られる立石寺



## 連載 私の学生時代 — 文芸学部で学んだ日々 ② —

今回は第2期生の湊一子さんに書いていただきました。

私は昭和29年4月、共立女子大学文芸学部美術史専攻の第2期生として入学いたしました。3年次になり専攻を決める時、山田智三郎先生、友部直先生の「丸ごと西洋」という雰囲気魅せられ美術史を専攻いたしました。

当時美術史を専攻したのは4名でした。それはもったいない程の内容の濃い、温かい授業を受けることができました。「美術史演習」の時間には Herbert Read の *The Meaning of Art* を原書で読みました。「鑑賞批評」の時間には、山田先生は車を拾って下さり上野の東京都美術館で私たちは日展の展示を見ながらその場での授業を受けるこ

とが出来ました。友部先生は私たちを日本橋のヤナセ前の道沿いに並んでいたブルーデルの彫刻を見て連れて行ってくださいました。

また大学と高校との授業の違いについて山田先生から教えていただきました。最初に先生の「西洋美術史概論」を受けた時、自分ではしっかり書いたと思った答案に可が付いていましたので、先生に「どこが悪いのですか?」と伺いに行きました。「あなたは本に書いてあることだけを述べているでしょう。自分がどう思っているのかが書かれていないからです。」と説明してくださいました。高校の答案との違いをなるほどと納得し、先生からの推薦書を多く読み、

自分なりの見解を書くようになりました。

新関良三先生は「大学とは水槽の中に金魚を泳がすように、恵まれた環境の中で自由に動いて欲しい。先生方はそれを見守る。」という趣旨のお話をなさいました。まさに大学教育とはそのようなものだと思銘を受けました。

趣味の陶芸を始めた時も、常に独自のものをと心がけました。これも共立に在籍した4年間にいただいた先生方の教えの賜物と思っております。

湊一子 (1958 卒)

## 百瀬好子さんを悼む

体調を崩していたヨッコの様子を、息をひそめるような思いで見守っていたが、ついに、掛けがえのない友は逝った。

百瀬好子さんとは、立川幸代さんと3人、入学後まもなく仲良くなった。「お互いを何で呼ぶ?」「ヨッコ、お立、お静」と、10代のノリで笑い合ってた。

授業も部活も一緒。休暇には三人旅。卒業式には「三人、普通にスーツで」と話していたが、私が就職先の事情で式に出席出来ず、後で、ヨッコが総代だったと聞いて嬉しかった。総代に相応しい親友だった。

「日本狭し」と言っていたヨッコは、心の中で何を思い描いているのだろう、と書いていたら、高校の教壇に立った後、旅行会社を経営した。海外に開かれた職種だった。やがて、大学、専門学校の講師、地方自治体の講座、ラジオ番組の旅コーナーに帯で出演するなど、旅のスペシャリストになった。「お静、感想を」と、番組出演時のテープが送られて来て、「見事」と返した。事実、見事だった。

人と誠実に向き合い、面倒見がよく、豪快で繊細、人柄も魅力的で友人も多かった。乞われて高齢者施設

の立ち上げに手腕を発揮したかと思えば、藤蔭流師範で、後進の指導に当たり、自身も国立小劇場の舞台に立つなど八面六臂の活躍。文芸学部の卒業生で創設した「文芸 OG ネットワーク」の初代代表としても尽力した。

あれは70代になっていたか、大学院生として共立に戻り、芸術を学んだ。大学での国文専攻に加え、生涯「文」「芸」を愛した。共立の建学の精神「自立・自活」の見事な体現者でもあった。

晩年は、妹さんが重篤な病に罹られ、渾身の介護をした。自身も辛い体調の中「妹の為にも生きたい」と言いながら、遂に天に召された。妹さんに神のご加護がありますように。

ヨッコ、ただただ寂しい。安らかに眠ってください。

脇田静子 (1960 卒)

OG ネットワークの初代代表、百瀬好子さんは、2023年1月にお亡くなりになりました。謹んでご冥福をお祈りいたします。(編集部)

## 広場

◆「文芸 OG ネットワーク通信」第31号 (2019.9.28 発行) の「共立 Spirit!」のインタビューでお話を聞かせてくださったシンガーソングライターの高水春菜さん (2006年文芸教養コース卒) が、去る2023年6月10日にザムザ阿佐谷にて行われた「東京-台湾 芸術交流【落語×現代舞踊×音楽】特別招聘公演 有你有我—あなたとわたし—」に出演されました。

## ◆著書紹介

『早世の画家・廣瀬勝平 日本と欧州、その足跡』(文芸社刊、2023年)

黒田清輝(1866~1924)に師事し、渡仏後、ナポリにて客死した画家広瀬勝平(1877~1920)の活躍を、孫である森本梢さん(1958卒、第2期生)がまとめられ、出版されました。

## 編集後記

EDITOR'S NOTE

コロナもだいぶ落ち着いてきました。今回「通信」の編集会議も1度対面で開くことができました。総会、サロン講座も再開できるといいですね。

OG ネットワークも20周年を迎え、通信担当者として、益々力が入るところです。

みなさまからのご投稿やご意見をお待ちしています。(O)